

CAUA シンポジウム2010 in 大阪 全体講評

只木 進一

佐賀大学教授・CAUA 運営委員

セキュリティ、共同化、教育、運用というのが今回のキーワードではなかったでしょうか。そして、大学の在り方の問題点と解決の方向が、情報システムで先鋭的に表れているのではないかと印象を強めました。

大学の情報システムには、法人としての業務（人事、財務など）、法人としての情報（広報、評価など）、教学の基盤（教務、図書館、教育環境）、病院を持つ大学では診療、そして教学そのもの（実験的に壊しても良いもの）という、セキュリティや求められる冗長性の異なるものが混在しています。それらの管理運用思想、その体制と方法、そして資源注入の優先度が、ごちゃごちゃになっているのが現状です。これは、情報システムに限ったことではありません。

実験として、大学へのインターネット導入が始まり、急速な普及の裏で、業務基盤にするための制度・体制の整備をおろそかにされてきました。急速な普及は、「インターネットは簡単」と「私は専門じゃないから」の共存を許してしまいました。これが大学のセキュリティ問題の基底をなしているという上原先生のご指摘でした。組織としてのガバナンス強化が必要なことは明らかですが、同時に、教育機関として、技術力の向上、高い技術力を持った人の養成・確保が求められています。大学は耐えられるでしょうか。

大学の情報システムのもう一つの問題は、無駄な投資です。クラウド技術が普及しつつある時代に、なんでも個別情報システムを持つというのは無駄です。また、情報システムは道具に過ぎないのであって、教員が教育・研究にその能力を注げるように支援するのが目的のはずです。梶田先生からは、学内でのシステムの標準化・共通化の進捗と、地域での標準化・共通化プロジェクトのお話がありました。こういう取り組みが、情報システムに係るコスト削減に繋がるはずですが、業務プロセス見直しを同時に行わないと、無限カスタマイズのコストが発生します。どうしたらよいのでしょうか。

小町先生の話聞いて、懐かしい思いをした方が多かったと思います。学生が動いているシステムを見る、プログラム相談などで運用サポートをするということが、技術者を育てるためには大切です。業務系と研究教育系の分離を適切にして、研究教育系には学生がもっと関与できると良いですね。しかし、そのためには業務系が独立して運用できなければいけません。情報系にリソースを投入できていない状況下で、可能でしょうか。

多くの大学では、ネットワーク部分を中心に教員が情報基盤の運用に関与しています。この部分をコスト削減し、教員が教育・研究に向かうためには、運用方法の標準化が必要です。パネルに参加頂いた小野先生の「運用の科学・工学」という提案には、魅かれました。情報システムの標準化が進んでいるので、対応して運用の標準化が可能な気がします。